奥多摩の教育
第 211 号
発　行
奥多摩町教育委員会

平成30年３月１日現在

児童数	１４５名
生徒数	８３名
教職員数	４８名

第30回 奥多摩展（児童・生徒 図工・美術・書写展）

奥多摩展は、選抜された児童・生徒の作品ではなく、町に学ぶ全児童・生徒の作品を展示することを目的に開催されており、本年度で、30回目となりました。

今年度は、１月20日から22日まで奥多摩中学校で実施され、奥多摩町の小・中学校３校の児童・生徒全員の美術作品（各平面作品１点、立体作品１点）が展示されました。小学校低学年のほほえましい雰囲気の作品から、中学生の緻密な作品まで、町内の児童・生徒の作品を一斉に鑑賞することができる貴重な機会となりました。

また、同時開催として小学校の児童による書写展も行われ、１・２年生は硬筆を、３年生以上は毛筆書写を展示しました。年明けということもあり、各校とも書き初めを出品していました。

来場者は、３日間で一般・来賓の方32名を含んで250名にのぼりました。参観者の感想の一部を紹介します。

（中学生保護者）

「子どもの作品を楽しみに観に来ました。中学生の作品のレベルが高く感動しました。先生からの解説も聞くことができて、我が子の頑張りをうかがうことができました。」

（一般参観者）

「小学校１年から中学校３年生までの力作に、その成長の兆しが見られ、自分自身が子どもだった頃に思いを巡らせ、ほんのりとした時間を過ごすことができました。」

また、児童も奥多摩展の鑑賞に行きました。子どもたちは、自分や友達の作品、そして上級生や中学生の作品一つひとつをじっくりと見つめながら、目を輝かせていました。小学生が中学生の作品を見て書いた感想を紹介します。

「鉛筆の隙間からライトがちょっと見えているところがよかった。」

「中学生の絵は、本物のように見えてすごいと思いました。」

「ストップモーションでは、現実では起こらないことができるので、そんな世界になって欲しいと思いました。」

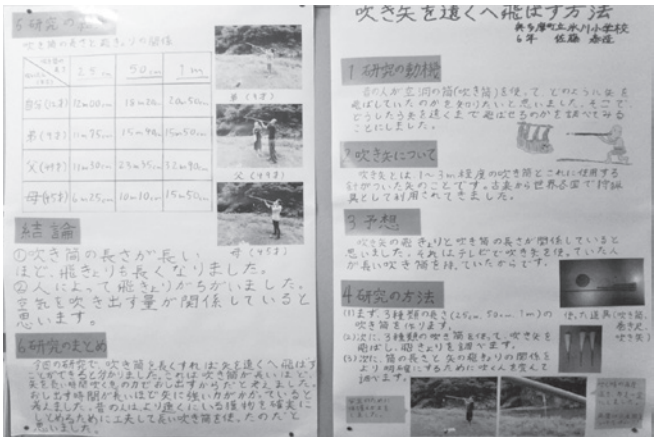
「『夏の思い出』という絵は、ガラスが一つずつとてもきれいでした。貝もついていて、本当に海のようでした。」

学区や校種を超えた作品に触れ、美術・書写作品への関心や、創作意欲が高まったのではないでしょうか。改めて、１年に１回、奥多摩町の児童・生徒の作品が一堂に会する機会が素晴らしいものだと感じました。

東京都小学生科学展

１月13日に、日本科学未来館（江東区）で開催されました東京都小学生科学展におきまして、氷川小６年生の佐藤泰造君が、奥多摩町の小学生を代表して、科学作品の展示、研究発表を行いました。

この科学展は東京都教育委員会の主催で、２年前から開催されており、都内の各地区の代表１名が、自ら決めたテーマについて研究した成果を展示・発表するものです。



佐藤君は、『吹き矢を遠くへ飛ばす方法』をテーマにして研究を進めました。昔の人が吹き矢を飛ばして獲物を得ていたことを知り、どうしたら矢を遠くまで飛ばすことができるのか、興味をもったことが研究の始まりでした。実験には自分で作った吹き筒と吹き矢を使いました。なぜ遠くに飛ばすことができるのか、実験結果から得た数値を基に課題解決することができ、主体的な研究体験となりました。発表においても、他地区代表の小学生、保護者といった観客がたくさん観ている中で、堂々と、分かりやすく発表することができ、とても立派でした。

奥多摩中学校２年生 岩原宿泊体験学習

１月31日から２月２日まで、新潟県湯沢町の岩原スキー場で宿泊体験学習を行いました。１週間延期したものの、インフルエンザ等で５名が欠席となり、21名の参加でした。天候に恵まれ、３日間とも晴れ間が覗ける絶好のスキー日和となりました。

１日目、関越トンネルを抜けてからの、あまりの景色の違いに興奮気味の生徒たち。ふかふかした２メートルを超える積雪のうえを歩く時の明るい表情が印象的でした。

２日目、恐る恐るだった初心者の班もプルークターンができるようになり、初リフトを経験しました。なかには初のリフト止めを経験してしまった子もいたようです。計５時間の講習の後でしたが、宿舎前での雪合戦でも元気いっぱいの生徒たちでした。

３日目、すべての班が山頂へ向かいました。上・中級者の班は転んで全身真っ白になりながらも、急斜面を滑り降りて来られるまでになりました。初級者の班ではフラッグをよけながら、ばっちり左右のターンを決めるまでになりました。

スキー実習とは別に、奥多摩中学校３年生で取り組んでいる奥多摩イノベーションに向けて、湯沢町観光協会の方にお話をしてもらいました。湯沢町の春夏秋冬の魅力や、普段当たり前と思っているところに価値のあるものがある、という大切なお言葉を頂きました。

また、宿舎であるガーデンクレスには、温かい部屋や温泉、特産のコシヒカリを生かした美味しい食事、スキー用具やウェア等、最高の環境を用意して頂きました。

関わった全ての方への感謝の気持ちと学んだ事を忘れず、今後の活動に生かしていきたいと思います。

子どもからの人権メッセージ発表会・中学生人権作文

昨年12月9日に文化会館で開催された発表会で、古里小6年・須崎樹君、氷川小5年・武内美以那さん、奥多摩中3年・若林心暖さんが人権メッセージを発表しました。その発表内容を紹介します。

『僕からの人権メッセージ』

古里小学校6年　須崎　樹

僕は、トゥレット症候群という病気です。無意識に大きな声を出してしまったり、身体が動いてしまったりする神経の病気です。この病気を治す薬はありません。

低学年の時、電車の中で大きな声が何度も出てしまったのを、高校生の人達に真似をされ、からかわれたことがあります。僕は、とても悲しくて、悔しい気持ちになりました。僕の病気は外見からだけでは、それと分からないのです。人混みで声が出て、知らない人にじろじろと見られたり、大人に「うるさい」と言われたりしたこともあります。こうして、僕は大勢の人がいるところに行くのを避けるようになった時期もありました。けれども、学校は少しも嫌ではありませんでした。クラスの友達は、僕が声を出しても全く気にせずにいてくれました。病気だからといって特別扱いすることもなく、いつも普通に接してくれました。それでいて、症状がひどく、激しく声が出ていると、「大丈夫。」「落ち着いて。」と、声をかけてくれました。僕は、とてもうれしい気持ちになりました。学校にいると、家にいるかのような安心感がもてるのです。僕は、クラスのみんなに支えられていると感じます。

世の中には、色々な人がいます。身体が不自由な人、心に病気を抱えている人、いじめなどで悩んでいる人。そういう人が身近にいたら、僕は、クラスのみんなが僕を支えてくれたように、その人を支えたいと思います。

僕は、自分の病気を通して、悲しかったり悔しかったりした経験から、人の痛みを理解したい、誰かのために行動したい、と考えるようになりました。

世の中の様々な立場の人が、互いの痛みを理解しようと思うことができたら、いじめや差別はなくなるのではないでしょうか。それが、今、僕が心から願っていることです。

『人権を守りたい』

氷川小学校5年　武内　美以那

この世の中には、やってはならないことがあります。その中で特にやってはならないと思うことは、「いじめ」「差別」「自殺」です。なぜならいじめや差別は人の心をきずつけてしまうし、自殺は大切な一つの命を失ってしまうからです。家族・親せきが悲しむので、今まで育ててもらったことを考えると、自殺はしてはいけないと思います。

いじめや差別をされて、自殺をしてしまう人がいます。いじめや差別を無くさなければいけません。どうすればいじめや差別が無くなるか考えてみました。人がいやがることはしない。自分が同じことをされたらどんな気持ちになるか考える。自分の生活でイライラしていることを他人にぶつけない。うらやましいという気持ちをいじわるに変えないで素直に「いいな。」という気持ちで相手をみとめる。こういったことだと思います。

次にいじめや差別をされた人が自殺をしないようにするにはどうすればいいか考えました。すぐに家族や先生に相談することが大切だと思います。いじめる人にはっきり「いやだ。」「やめて。」と言うのはむずかしいと思うので、近くにいる信用できる大人に相談することが一番だと思います。

いじめる人は「親や先生に言うな。」とか「言ったら許さない。」とかおどしてくることもありますが、勇気を持って親や先生に相談してください。

だれにでも安心してくらすという人権があります。その人権を守るために、私はやさしい大人になって助け合って生きていきたいです。

『東日本大震災を知る』

奥多摩中学校３年　若林　心暖

小学３年生の時、私達の小学校に転入生がきた。東日本大震災の被害を受けた子達だ。

２０１１年３月11日。私達は、この日にちを忘れない。東日本大震災が起こった。死者・行方不明者は、１万人を超えた。これは戦後初だという。当時、私は小学２年生だった。

私は、去年東北へ旅行に行った。みなさんの中には、東北へ行きたがらない人もいると思う。しかし私は、東北へと訪れてほしい。

少し前、ツイッターで「東北でよかった」というハッシュタグでのツイートが、話題になったのを覚えているだろうか。被災地というだけで、見る目が変わってしまう、というのは、良いことではない。東北だからこそ、よかったということもたくさんあると思う。

被害を受けた人の気持ち全てを、被害を受けていない私達は知ることができないかもしれない。しかし、知ろうとすることはできるだろう。あるきっかけが私にそのことを教えてくれた。

被災地から転入生がきたのだ。東日本大震災を経験したが、それまで震災を少し遠く感じていた私を、ぐっと震災に近づけたできごとだった。その子達は、家がなくなり、住める場所もなくなったと言った。ランドセルをも取りに帰ることができなかったそうだ。どれだけ大きな被害だったかなど、テレビでしか見ていなかった私にはわからない。だが、震災を知る、ということの大切さは強く感じた。

私は今も、あの日のことを鮮明に覚えている。黒板が音をたてながら揺れ、机も椅子も元の場所から動く。初めての体験に、私は怖さしかなかった。しかし、被災地の方が感じた思いは、私が感じた思いとは比べものにならない。私達が、その思いを知ることはできないのだろうか。どんな状況、どんな思い。想像するだけでおそろしい。東北の復興への道のりも、私達は知る必要があると思う。みなさんにも、東北を訪れてほしい。東北でよかった、と思うことが、きっとたくさん見つかるはずだ。

この作品は、「全国中学生人権作文コンテスト」で、作文委員会賞に選ばれました。

ご成人おめでとうございます

1月8日に文化会館にて新成人30名が出席し、成人の日の式典が行われました。

今年の新成人は、平成９年４月２日から平成10年４月１日までに生まれた方で、38名の方が対象者となっておりました。式典では「コールやまぶき」の方々によるお祝いのコーラスや、出席者全員による校歌の合唱も行いました。また、式典後は新成人代表による進行で、保育園・小学校・中学校の恩師の先生方やご家族の方も交えて、懇親会が盛大に行われました。

小学生スキー教室

1月26日から27日の日程で新潟県・湯沢高原スキー場で行われました。小学校４年生から６年生の参加者17名を、技術と経験回数によってクラス分けし、奥多摩スキークラブの皆さんの指導のもと、全員がスキーを上達させることができました。初めて体験した子どもたちも次第に滑れるようになり、楽しい時を過ごしました。

関係者のみなさん、ご協力ありがとうございました。

奥多摩スキークラブの皆さんと参加者一同

講演会

平成29年度ジュニア育成地域推進事業講演会が行われました。

２月４日に文化会館・視聴覚室にて保健運動指導士として、30年以上にわたり多方面でご活躍されている榊原あつ子氏を講師としてお招きし、『のびつづける子供に！』と題してご講演をしていただきました。

成長期の子どもたちの体づくり・心と身体を育てる運動について貴重なお話をしていただきました。

お詫びと訂正

平成29年12月5日発行『奥多摩の教育』第210号8ページの郷土奥多摩（文化財）に記事において、石棒の長さに誤りがありました。

正しくは、「長さ二十八・三㎝」お詫びして訂正いたします。

各学校の卒業式・入学式

【卒業式】

・古里小学校　3月23日（金）午前9時30分

・氷川小学校　3月23日（金）午前9時45分

・奥多摩中学校　3月20日（火）午前9時30分

【入学式】

・古里小学校　4月6日（金）午前10時30分

・氷川小学校　4月6日（金）午前10時00分

・奥多摩中学校　4月9日（月）午前10時00分

親の気持ち　子の気持ち

教育相談室長　井上　英二

日本の花と言われると、サクラと答える方が多いと思います。そのサクラの蕾には、冬の一定の寒さが開花を促進する「休眠打破」と呼ばれる性質があるということを聞いたことがあります。サクラは花が散った後、夏までに翌年の春に咲く花の芽を形成し、いったんは休眠に入り、その後、冬に5度前後の低温にさらされると、眠っていた花芽が目を覚ます。そして、2月以降に気温が上昇すると花芽が成長し、花を咲かせる性質があるのだそうです。つまり、サクラの開花に当たって「寒さ」という「試練」が大切だということではないでしょうか。このことは、子どもたちの教育には当てはまることだと思います。子どもたちは、日々、学習面や生活の中で試練の場を乗り越え、成長していくのだと思います。考え、悩み、子どもたちはぐっと大きくなっていくのだと思います。時には、涙することもあるでしょう。そこを我慢し、頑張ることで自立の力を自分自身で育てていくのではないでしょうか。

このような子どもの試練を乗り越えさせるのに大切なのは、ご家庭の愛情であると考えます。子どもたちは愛されているという安心感から、さらなる自信や意欲をもち、自分や周りのよさに気付き、大切にしようとします。頑張ろう、乗り越えようとする心も育つのです。パナソニックの創始者の松下幸之助さんが「親として大切なこと」という著書の中で、家庭の果たす役割について、左記のように述べています。

「苗木を育てるためには副木が大切です。すくすくまっすぐに育てるためには副木が必要です。さもなければ、苗木は自分の力で立っていられない。ほうっておけば、雨風にゆがめられてとんでもなく曲がりくねった姿になってしまいます。しかし、やがて自力で伸びてゆけるようになれば、自然と副木は必要ではなくなってくる、要らなくなってくるのであります。副木は苗木をゆがめてしまうためにあるのではなく、これを伸ばすために立てるのです。」

子どもたちが自分に自信をもち、日々の生活の中で、友だちとともに学び、ともに競い合う中で成長していくためには、家庭が安らぎのふるさとであることが大切です。日々激しく変化する社会の中で、子どもたちが自己実現を果たし活躍できるよう、家庭が副木となり、深い愛情で、これからも応援していってほしいと思います。

郷土奥多摩（文化財）

その８ 日食供養塔

文化財保護審議会委員　小林奈都美

今回の郷土奥多摩の紹介は、町指定の文化財日食供養塔です。水と緑のふれあい館を囲むように、ダム建設で水没した村の石碑や石仏が「石碑の小径」として並び、整備されています。その中に寛政11年（１７９９年）と刻まれた日食供養塔があります。

この日食供養塔は、元は原の恵日山門覚寺の前にあったものをダム建設に伴い、出野バス停付近に移動され、現在は石碑の小径に置かれています。高さは118㎝、幅は56㎝で、写真のように「日食供養塔」の文字と直径15㎝ほどの日輪「〇」などが彫られています。

日食供養塔

天文ファンがこの石碑をめあてに来町するほど、全国的にもあまり例のない供養塔です。

現代の日食（太陽が月によっておおわれ、太陽が欠けて見えたり、あるいはまったく見えなくなる現象）や月食（地球が太陽と月の間に入り、地球の影が月にかかることによって月が欠けて見える現象）は、天体の運行によって生じる周期的現象であることは知られていますが、現代と違い昔は、日食や月食のしくみを科学的に説明できなかったため、人々はそれらの天文現象を不吉だと感じたり、あるいは何か悪いことの前兆と考えていたようです。

この日食供養塔には、寛政11年（１７９９年）と刻まれていますが、その年には東京付近から見られる日食は起こっていません。ただ、寛政11年の前年までの４年間で３回、部分日食が見られています。また、少し前ですが、天明６年（１７８６年）には、最大食分（欠けた部分の割合）が約98％の深い日食が見られ、供養塔が建てられた翌年（１８００年）には約92％の日食が、１８０２年にも約80％の日食が見られ、太陽が月によって隠れました。（※１８００年房総半島で、１８０２年奄美大島などで金環日食を観測）奥多摩では、金環日食や皆既日食は見られなかったものの、供養塔が建てられた前後15年ほどで６回の部分日食が比較的連続して見られたのは、当時、人々を不安にさせる出来事だったと想像できます。

この日食供養塔は、過去の日食を供養したものか、これからさらに起こり得るかもしれない日食を畏れたものか、記録に残っていませんが、当時、村の人々が「疫病がはやるのを天とうさま（太陽）が代わって病んでくださる」と「天とうさま」を敬い、祈りを込めて建てたものではないでしょうか。

水と緑のふれあい館の石碑の小径には、他にも「徳富蘇峰詩碑」（町指定文化財）、道祖神、六地蔵、灯明台、廿三夜塔など、たくさんの石碑や石仏が移設されています。一つひとつの石碑や石仏には意味があります。昔の人々は身近なものに何を思い、どう接し、どんなふうに生活していたのか・・、奥多摩湖へ行かれた際には、石碑の小径を散策しながら思いを巡らせてみてはいかがでしょうか。

参考：内田正男『日本暦日原典』、渡辺敏夫『日本・朝鮮・中国日食月食宝典』、日食月食星食情報データベース

徳富蘇峰詩碑など

廿三夜塔